

富山県を中心としたかご漁業の歴史

土 井 捷三郎
(富山県水産試験場)

はじめに

「かご」は、タコ壺、ウナギ筒、柴漬などと共に誘導陥せい漁具に属し、うけ、やな、筒などから枝分かれしたものである。たこ壺・ウナギ筒などとは漁獲物が外側から見えることで区別され、うけ・やななどとは餌を用いて誘引し漁獲することで区別される(野村 1985)。

うけ・やなが「古事記」「日本書記」「万葉集」などに記述され、タコ壺など筒漁業も相当古代から用いられていたのに比べ、かごについては、琵琶湖における「たつべ」が今のところ、最も古い形と推定されている(日本学士院 1982)。

近年、かご漁業は漁具構造が簡単なこと、他の漁具では操業困難な起伏の多い深海でも漁獲可能なこと、及び鮮度の良い漁獲物を得ることができることなどの利点から、多くの水産物の漁獲手段として、全国各地で行われている。しかし、かご漁業では過大な漁獲努力による資源の枯渇が懸念され、資源管理方策の確立が緊急の課題となっている。また、漁獲対象の種は成長の研究が難しいもの(軟体動物、甲殻類など脱皮したり、年齢形質をもたない)が多いこと及び季節変化の少ない環境(低温深海)にあることなどから、資源生物学的知見の蓄積は少なく、さらにこれらの漁業に関する漁獲統計の整備は遅れたままで推移しているのが実情である。これらのことから1981年に「かご漁業に関する諸問題」のシンポジウムが行われ、その結果がとりまとめられ報告されている(日本水産学会 1981)。この報告では各海域での対象水族の生物学的特徴に力点がおかれ、現在行われている各種かご漁業がいつどこで始まり、どのようにして伝播していったかについての詳しい記述は少ない。そこで、1980年から1982年にかけて文献調査と聞き取りを行い、かご漁業の発祥及び伝播過程の解明を試みたので報告する。

とりまとめにあたり、多くの方々にお世話になったが、特に日本海区水産研究所図書係の本田陽子さんには、文献収集に多大な協力をいただいたので、ここに記して感謝の意を表します。資料で、「第2回水産博覧会審査報告」は国内の図書館にはみあたらない(国会図書館の回答)とのことであったので、未調査部分の文献探索などとともに情報の提供を関係各位にお願いする次第です。

バイかご漁業

本漁業は、バイかご、ツブかご漁業と呼ばれ、今日、全国各地で行われている。漁獲の対象はエゾバイ科の種が多く、鳥取のバイ、北陸のエッチュウバイ・ツバイ、及び北洋・北海道のツブなどが有名である。

本漁業に関しての資料は非常に少なく、最も古いものは1886年の「日本水産捕採誌(全巻)」であ

った。これには因幡国（鳥取県）と土佐国（高知県）のバイかご漁業が紹介されており、いずれも設置水深が10ヒロ（15m）であるとなっているところから、バイ（*Babilonia japonica*）を対象とした漁業と推定される（図1）が、いつ、この漁業がこれらの地区で始まったかの記述はなされていない（農商務省 1912）。

この2地区を除くと、バイ類を対象としたかご漁業に関する古い資料は富山県に限られる。富山県では、1740年代からかごによるバイ類の漁獲が行われている（富山県水産課 1941）。古くからバイかごを「ばいだま」と称し、その漁場を「ばいだま場」と呼んで（図2）、その漁獲物は藩主への献上品のリストにも上げられていた（滑川町 1913）。

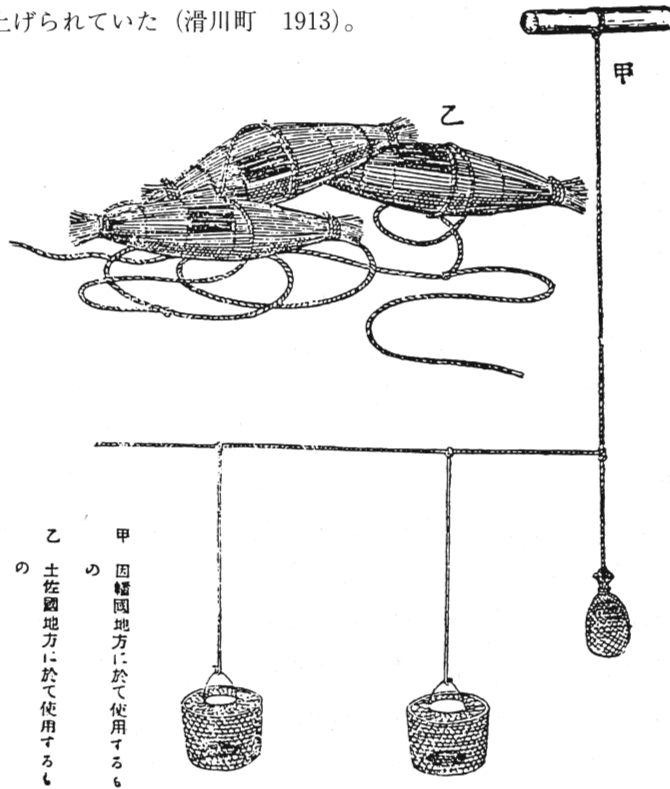


図1 鳥取（因幡国）及び高知（土佐国）で用いられていたバイかご
（日本水産捕採誌 農商務省 1912）

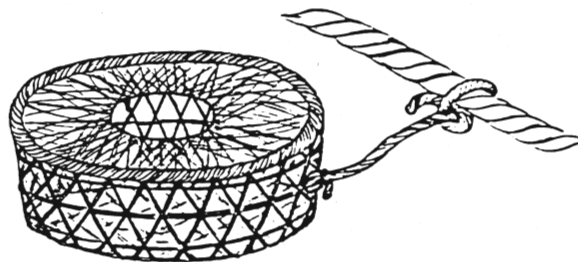


図2 昭和初期の富山（新湊地区）で用いられていたバイかご
（富山湾のばい漁 寺町 1933）

図3に明治期以後の富山湾付近におけるバイかご漁業の普及過程を示した。明治期まで、バイかご漁業は富山県東部の滑川、魚津の2地区のみで操業されていたが大正期には県中西部の新湊、四方、さらに県東部の黒部、宮崎地区にも普及した(富山県漁連 1922; 布目 1982)。また、魚津地区の漁船による1896年(明治29年)の試験操業の経験から(富山県漁連 1922), 50数年後の1952年(昭和27年)ごろからは石川県佐々波沖および新潟県佐渡島に富山の漁船が本格的に進出した。富山県船が進出するまで石川県能登地区及び新潟県佐渡島では、バイ類の食習慣がなかったと言われている。特に新潟県では、バイ類を「死人を食う貝」(佐渡島の流人が逃亡し、溺死した死体に多数のバイが付いていたことによる。)として嫌われていた。このため富山県船は新潟県に水揚げすることができず、梱包して富山・金沢などへ送ったと言われている(水野 聞き取り)。富山県船の進出により、石川県では1955年(昭和30年)頃から能登半島を中心に、新潟県では1957年(昭和32年)頃からバイかご漁業が開始された。新潟県でのバイを食べる習慣は、山間部の温泉客を対象とした料理から徐々に一般化したとされている。

現在、バイかご漁業は日本海側ではすべての府県で行われており、太平洋側では日本海側ほど盛んでないものの、岩手、静岡、宮崎など10県で普及している(日本水産学会 1981)。

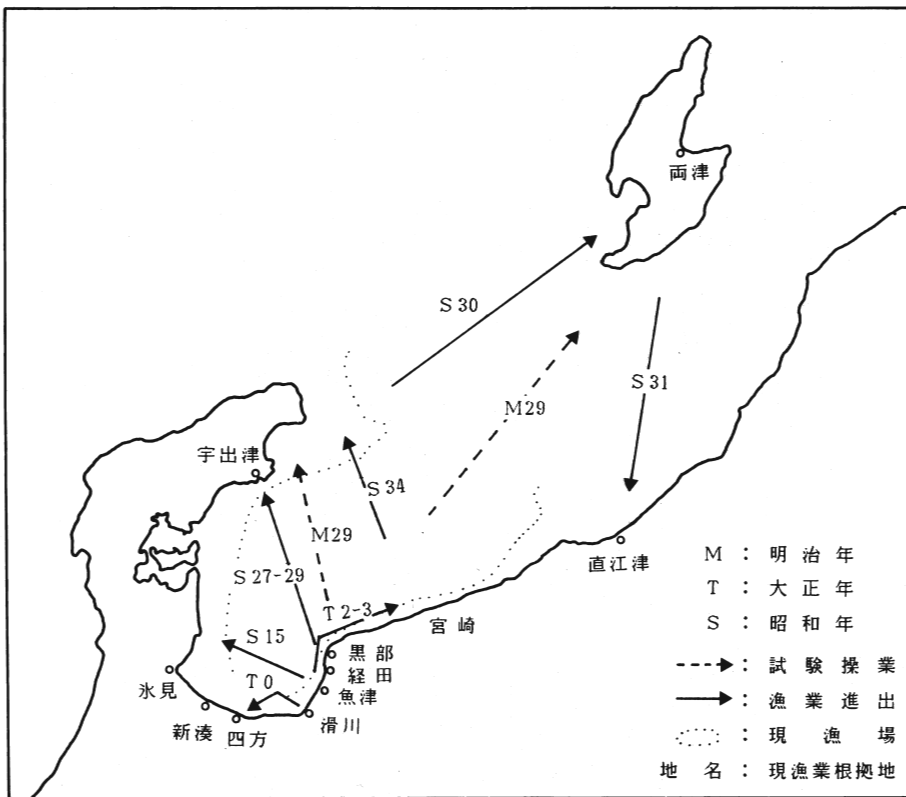


図3 富山湾及び周辺海域における富山県船によるバイかご漁業の伝播状況

カニかご漁業

1986年における日本海ベニズワイの漁獲量は4万8千トンにもおよび、1962年に富山県魚津市の漁業者、浜田寅松氏が考案したベニズワイかご漁業（図4）は、現在日本海のすべての県に普及し、その普及過程は、1967年新潟県、1968年兵庫県、1969年京都府、福井県、1970年石川県、鳥取県、島根県、山口県、1978年青森県となっている（土井1987）。

一方、北海道にはカニかご漁業の資料があり、富山のベニズワイかご漁業の開発年代より以前から行われていた（谷野 1967）。それによると、朝鮮半島で1927年から開始されたケガニかご漁業を技術導入し、1934年には北見地区でケガニを、同じく雄武地区ではズワイガニを対象としたかごが開始されている。このことから北海道におけるベニズワイを対象としたかごは、富山県からの普及とともに、朝鮮半島のカニかご漁業も参考に開始されたとみるのが妥当であろう。

北海道におけるカニかご漁業は、富山湾のベニズワイかご漁業より45年前後早く開始されており、ベニズワイかご漁業の考案者、浜田（1962）は、その報告で富山県に古来からみられた磯端カニかごを参考に研究したと述べているものの、浜田氏は北海道及び朝鮮半島に出稼ぎの経験があり、この時の見聞も参考にしたのではないかと推定される。浜田氏が参考にしたと述べている「磯端カニかご」についての資料は、今のところ富山県内にはまったく見つかっていない。

今日までの資料で、カニかご漁業の最も古いと考えられる朝鮮半島におけるケガニを対象としたかご（図5）は、従来の幼稚な小型四ツ手網を用いた漁法から、1927年に漁獲効率を高めるために、転換したものであると記されている（吉田 1954）が、朝鮮半島の漁業に母体となる漁法は見当たらず、当時は日本からの漁業進出が盛んに行われていたことから、日本のかご漁業を参考にしたものと考えられる。しかし、どこから導入されたかについては明らかでない。

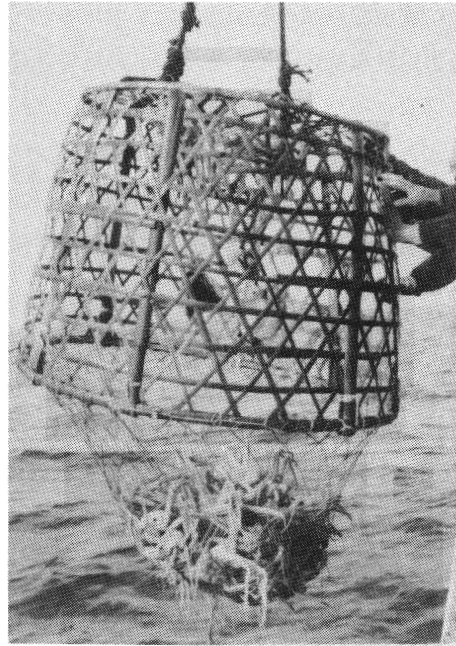


図4 浜田寅松氏が考案したベニズワイかご
（富山県水試撮影）

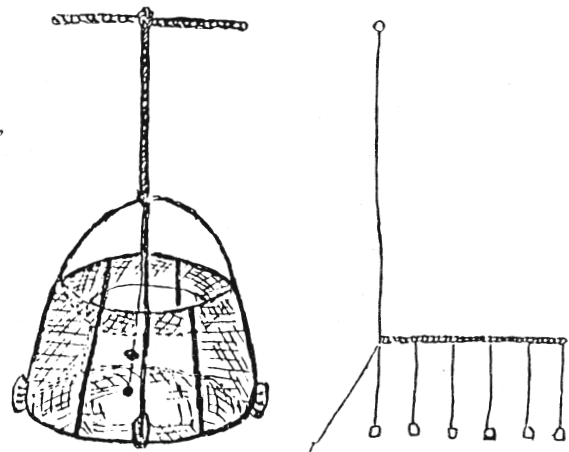


図5 昭和初期の朝鮮半島でケガニの漁獲に用いられていたカニかご
（朝鮮水産開発誌 吉田 1954）

なお、福井県ではガザミかごを1963年に三重県から導入した(山田 1968) ことなど、沿海各地でのガザミ、ヒラツメガニ、モクズガニ、アサヒガニなどを対象としたカニかご漁業の実態については報告がなされているものと思われる。しかし、資料未収集のため発祥または伝播過程の解明は今後の課題として残されている。

エビかご漁業

エビ類を対象としたかご漁業は、北海道や石川県のトヤマエビかご、太平洋側のイセエビ、アカザエビかごなどが有名であるが、古来は湖、潟などのスジエビかごなどが起源と考えられ、琵琶湖のタツベ漁(図6)、諏訪湖の兜漁(図7)にその基本型がみられる(近江水産組合 1910; 田中 1918)。

海面における古い年代のエビかごに関する資料は非常に少なく、岩手県のエビ筒漁のみであったが、その内容についての記述はなかった(農商務省 1912)。

富山県では1962年に新潟県から導入し、新潟県ではその前年に、北海道から入り合い権に基づき漁場の利用を行っていた北海道漁船の操業を見て、自県で行うようになった(新潟水試 1962; 酒向 1985)。

北海道では1963年に胆振地区でエビかごの試験操業を行ったという報告(北海道水試 1959)があるものの、1941年に調査された漁具図説(勝木 1964)には、カニかご及び魚類かごは記録されているが、エビかご漁業の解説および記述はなく、技術導入によって開始されたものかどうかは不明である。

エビかご漁業は前2者のかご漁業よりも新しい漁業であると考えられるところから、各種のかご漁業で混獲されるエビ類を目的として、特殊化したかご漁業と考えた方が妥当と思われる。

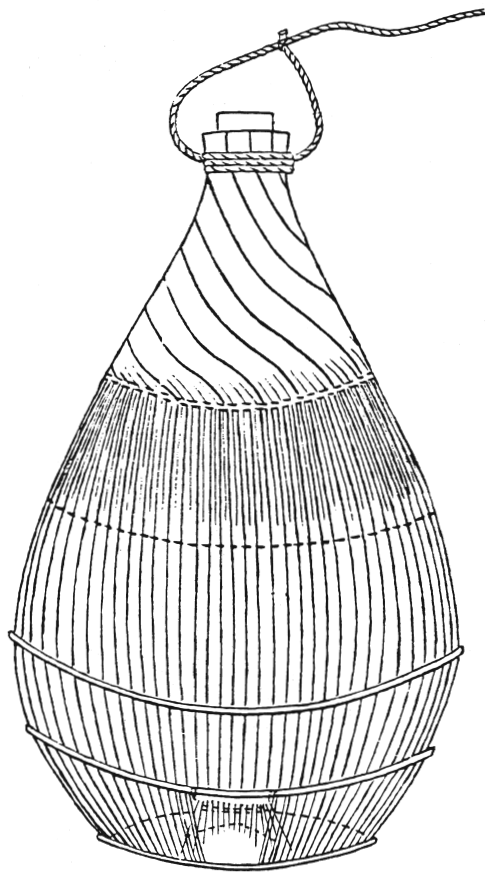


図6 琵琶湖で用いられていた漁具(タツベ)
(琵琶湖漁具図説 近江水産組合 1910)

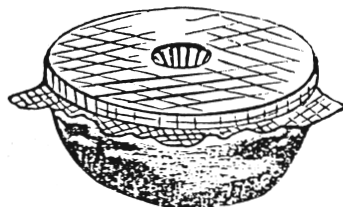


図7 諏訪湖で用いられていた漁具(かぶと)
(諏訪湖の研究 田中 1918)

その他のかご漁業

金田 (1986) は、カニ、バイ及びエビを除いたかご漁業を7種 (アナゴ、アイナメ、フグ、ボラ、イカ、アワビ、ウニ) あげ、その漁具漁法を説明している。今回の調査した資料 (農商務省 1912; 勝木 1937) でも、1661年肥後国 (熊本県) の「鳥賊籠」 (図8), 1886年北海道渡島・亀田, 青森県陸奥の「アブラコ (アイナメ) 漁」 (図9), 北海道利尻の「ホッケかご」, 1917年富山県の「黒鯛籠」及び1912年青森県の「アワビかご」など対象種を付けたかごが各地に営まれていることが明らかとなった。

日本水産学会 (1981) は、かご漁業の漁獲対象種をバイ類9種, カニ類19種, エビ類7種及びその他9種の合計34種示しており、現在では、全国各地でもっと多くの種類が漁獲対象となっているものと推定されるが、その実態は明らかにされていないのが現状である。

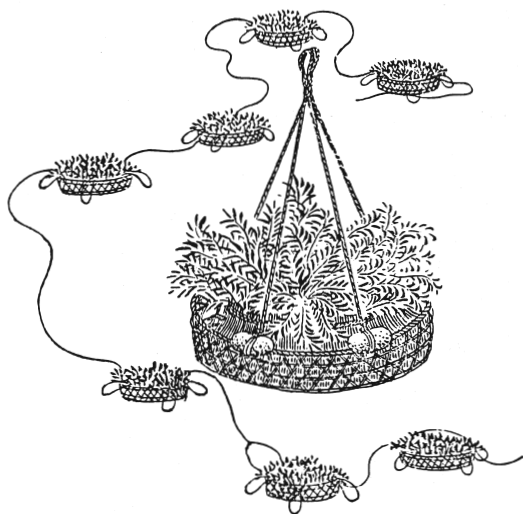


図8 熊本で用いられていたイカかご
(日本水産捕採誌 農商務省 1912)

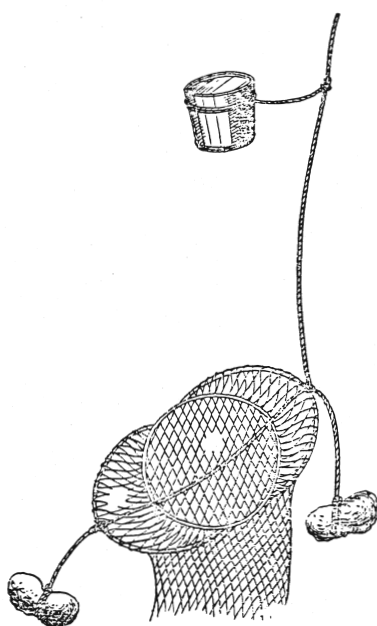


図9 北海道及び青森で用いられていた
アブラコ (アイナメ) かご
(日本水産捕採誌 農商務省 1912)

おわりに

富山湾でのかご漁業は、無動力船の時代から行われており、漁場への航行はゴザ帆による帆走と櫓で行い、舟の胴の間にとりつけたロクロで藁のロープ及び網で作られた漁具を巻き上げた。また、冬期間の操業が一般的だったため船の遭難も多く、かご漁業を営む家は出世した者もなく、何時とはなく家系が途絶えたと言い伝えられるほど苛酷であったようである (滑川町役場 1913)。このためか、かご漁業の歴史に関する材料は、聞き取り調査だけでは充分でなく、聞き取りで得られた断片的な情

報を参考に、各地の図書館の古い資料を掘り起こすことで収集することが多かった。

現在、かごの構造及び餌は、全国の各地域で多種多様であり、富山湾内でも各地域で異なっている。また、漁獲対象種で違っていることが多い。これは、新たな漁業としてのかご漁業を技術導入した際の、導入地域の違いが最も大きく左右していると推定される。このことは逆に、かご漁業の歴史を推定するための重要なポイントであることを示唆している。すなわち、それらの類似性を明らかにすることから、地域的伝播過程を明らかにできるのではないかと考えている。

今後も、全国的な情報の収集を行い、順次充実した内容としてとりまとめたいと考えている。

本漁業に対する関心が高まり、さらには資源生物学的研究が発展することを期待し筆を置く。

文 献

金田禎之 (1986). 日本漁具・漁法図説. 成山堂書店, 東京:567-592.

土井捷三郎 (1982). ベニズワイの生態と資源に関する研究. 昭和61年度地域重要新技術開発促進事業報告書, 富山水試他:2.

浜田寅松 (1962). 紅ずわいがに籠縄漁業. 第6回漁村青壮年婦人グループ富山県大会発表資料概要:1-12.

北海道水試 (1959). エビ籠網漁業試験. 北水試月報, (16):11.

勝木重太郎 (1937). 漁具図説 (全二冊). 左文字書店:49, 112-113, 152-158.

滑川町役場 (1913). 滑川町誌 (下巻). 高畑商会, 富山:435-436.

日本学士院日本科学史刊行会 (1982). 明治前日本漁業技術史. 井上書店, 東京:666-673.

日本水産学会 (1981). カゴ漁業. 恒星社厚生閣, 東京:144.

新潟水試 (1962). エビ籠延縄漁業. 日本海区水産試験連絡ニュース, (136)

布目久三 (1982). 四方郷土史話. 富山スガキ, 富山:263-264.

農商務省水産局 (1899)*. 第2回水産博覧会審査報告:207.

近江水産組合 (1910). 琵琶湖漁具図説:53-54.

酒向 昇 (1985). 海老. 法政大学出版局, 東京:72-74.

農商務省水産局 (1912). 日本水産捕採誌 (全). 水産社, 東京:155-157.

野村正恒 (1985). 最新漁業技術一般. 成山堂書店, 東京:217-220.

田中阿歌磨 (1918). 諏訪湖の研究 (下巻). 信濃教育諏訪部会蔵版, 岩波書店, 東京:1422-1423.

谷野保夫 (1967). 北海道におけるズワイガニ漁業について. 日本海区水産試験連絡ニュース, (189):3.

寺町昭文 (1933). 富山湾のばい漁. Venus, 3(6):358-365.

富山県漁業協同組合連合会 (1922). 富山県水産誌:39-40, 61-62.

富山県水産課 (1941). 紀元2600年輯録. 富山県の漁業 (第1部・沿岸漁業):96-98.

山田栄三郎 (1968). 福井県小浜湾におけるワタリガニ (ガザミ) 籠漁業について. 日本海区水産試験連絡ニュース, (201):2.

吉田敬市 (1954). 朝鮮水産開発史. 朝水会:400.

*直接参照出来なかった。